

*Resin-ens* 遠なる風、彩りの音、夜空に輝く月

「そんな人なんていない」

望んだ帰趨きすうと願わなかつた終焉しゆうえんの先にある今、俺にそんな人が居るはずもない。

だから俺は、茜の声よりもはつきりと、

強さも、見つめる視線も、背筋も、何もかも一直線に、そう告げた。

——  
居元直哉

肩に手を掛けていた。

気が付いたら、藤井さんの肩を揺さぶっていた。

「ねえ…どう、して…。ど、うして…遼風さんを………」

私は遼風さんと離れたくないし、そんな未来なんて考えたくない。

——  
音瀬紗

寂寥

せきりょう

---

## 音瀬紗

五月三日（土曜日）

という遼風さんの言葉に、私は思わず叫びそうになった。というより、彼女が私の口を思いつきり塞がなければ、今頃叫んでいたと思う。辺りから注ぎ込まれる視線は、叫んでいた疎ましい視線だったに違いないけど、何とか奇異のそれにとどまっている。

「ほ、本当ですか？」

遼風さんが私の口を開放し、椅子に座り直してから私は言った。その時を待っていたかのように頭の後ろに集まっていた幾つかの圧力が引いていった。

「はい。昨日の、放課後」

「そうなんだ」

ふと、窓の外に見えた遅咲きと言われたソメイヨシノは、一斉に満開になろうとしている。それは、視線を戻した先にあった遼風さんの頬の色とびつたり重なった。

「それで、あの、あたしはどうしたらいいと思いますか」

いつかのやり取りを思い出す。いつもと変わらない調子で

放たれた遼風さんの言葉。『あたしにそんなことをされた人は迷惑ですよ』という遼風さんの言葉。どこまで苛められているのか、どこまで敵に回しているのかは、普段の遼風さんの行動を見る限り、想像できないし、その事実すら、想像させようとする。

長袖の先に見える手の甲には傷一つついていないし、もちろん顔にだってそんな形跡はない。そう言ったことも、遼風さんがどんな状況にいるかという判断を鈍らせる原因になっている。そしてそれは、私と遼風さんの微妙な距離を象徴しているようにも思えた。

「音瀬さん？」

「そうね…」

思考が脱線しすぎて、質問の答えを考えるのを忘れていた。「どうしましょう」

お店で同じようなことを言われたら、満面の笑みで「ありがとー」。これで一発なのに、どうして現実はこのようにやこしいんだろう。

そんな難題に、私専用の勉強会を中断し、二人で解決策を模索する。遼風さんが昨日の放課後、男の子から言われた、二人の関係を変化させる魔法の言葉への。

## 居元直哉

十一月九日（火曜日）

「あつついよ、直ちゃん」

茜が上気した顔に裸まで後二枚という格好でそんなことを言う。いつもより舌つ足らずな口調が、茜の心境を良く表していた。おでこには髪が幾つか張り付き、首筋には胸元に向かって走っていく幾粒かの水滴が見える。丁度その肌の色は、冬を待ちわびる色に染まった葉にびったりと重なって見えた。

「お風呂かシャワーが欲しいよ」

「何事も我慢だ」

「直ちゃんの意地悪」

「大体にして誘ってきたのは茜の方だろ」

全ては、文化祭の後片付けをした昨日、茜がご苦労さん会をやらうと提案してきたことから始まった。それを目聡く見付けた義明が、「俺も連れて行ってくれ」と

せがんできた。

「春日君も頑張ってくれたもんね」

「そうだな。じゃあ、新河流かたなの北口に二時って事で」

「おっけー。休日にも茜さんに会えるなんて俺は幸せだー」

そう叫ぶと、義明は教室から走って出て行った。

「ねえ直ちゃん。明日の午前中は暇？」

二日間続く代休の予定に頭を巡らせる必要は無かった。たった今、一つ目の予定が出来上がったところなのだ。

「特に何もないけど？」

「それじゃあ、ちよつと私に付き合ってくれる？」

休日に茜のお願いか。買い物とかは沢渡さんや佐々木さん辺りと行くだろうし……と、考えを巡らせて、幾つかの答えが頭に浮かんできた。

「図書館とか、バスケットの類か？」

「流石直ちゃん。事が終わったら心も体もリフレッシュ！」

「了解。俺も付き合うよ」

久しぶりとなる茜との

バスケットの予定はこうして決まり、首謀者の茜は俺の隣で健全な汗が引くのを待っていた。

## 音瀬紗

ノートの上を滑らせたシャーペンを置き、腕を突き上げ大きく息を吸う。同時に見上げた天井はとても高く、吸い込まれそうなほどだった。市立図書館は遠いですから、と、遼風さんが紹介してくれた鈴校の図書室は、私が想像していた図書室とはスケールが二回り以上違っていた。もちろん、小学校の図書室や中学校の図書室なんて、比べるのが失礼なぐらいだ。ここまでくると図書館というのがふさわしい。

遼風さんの爆弾発言の影響で一時は騒然となった勉強会も、『ここは図書館だから』という事で一旦落ち着かせることになった。それはこの雰囲気は圧倒されたからなのかも知れない。

理科の参考書を戻すために椅子から立ち上がり、本棚の群れに足を踏み入れる。それはちょうど、河川駅近くの低層のビル街を歩いている時の感覚に似ていた。ビルの連なりと本の連なり、ビルの密度と本の密度、肅々と本を選ぶ人と無言で目的地を目指す人。ただ違うのは、天井があるという事。

目的の棚を見付け、本を戻す為に持ち直す。良く整頓された本棚は、私が本を抜いたところだけ、綺麗に一冊分、ぼつ

かりと穴が空いていた。

席に戻ると、遼風さんは数学の参考書を開いていた。ノートを広げ、シャーペンのノックするところを左手で下唇と顎の間に押し当て、右手でページを行ったり来たりさせている。

「ただいま」

そう言うと、遼風さんはすぐに私の方に首を向け、「お帰りなさい」と言った。そして、「これで、今日の理科は終わりですね」と続ける。

「そうですね」

春休みから始まったここを利用した勉強会は、順風満帆とは言われないけれど着実に進んでいて、ついこの間、一年生の範囲を全部おさらいし終わったばかりだ。もちろん、休み明けには三年生最初の中間テストがあるから、それに向けての勉強も一緒にしながらだ。

遼風さんが言うには、私は基礎的な部分は出来上がっているから、後はそれを中学で習った問題に応用させることを覚えればいいみたい。この辺りは、小学生の頃に図書館通いをしてきた影響だと思う。

「それでは、残りの時間は数学を勉強しましょうか」

「はい」

手首から外してテーブルの上に置いた新調したばかりの腕時計の短針は、もうすぐ〈6〉と交わろうとしている。休日

は一時から七時。平日は四時から七時。これが私達が決めた勉強時間だ。休憩を挟みながらもこれだけの時間集中でできることに驚く自分がいた。そしてこれはきつと、遼風さんの教え方が上手いからだと思う。数字を分数で割ったときにどうして数字が大きくなるの？という初歩的な質問にも、分数を割り算に分解するとわかりやすいですよ、と教えてくれた。

「わからない問題でもありましたか？」

私の眼差しに気づいたのか、遼風さんが問題集から顔を上げる。

「いえ、大丈夫です」

「そうですか」

そう言うと、遼風さんは手元の問題集に目を戻した。私が勉強している間、遼風さんもこうして勉強している。せっかくの図書館なのに小説などを読もうとしないところは、私に合わせてくれているのか、元々本を読まない人なのか。

いけないいけない。

一つ深々と呼吸をして私は数学の問題集に目を向け、シャペンを握った。

それにしても……。ノートに書かれたその相手の名前が目に入る。〈藤井紀秋〉遼風さんの大切な友達の名前。

いけないいけない。

一つ深々と呼吸をして私は数学の問題集に焦点を合わせ、

シャペンを握り直した。今は勉強。今は勉強。気になるとがあっても、今は勉強。

ここで解の公式を使うから……えっと、解の公式は2a分のマインスb、プラスマイナス——3——ルート……

「音瀬さん？」

「え、あ、はい？」

「あつ、ごめんなさい。計算途中でしたか？」

「大丈夫です。解の公式を思い出している真っ最中でした」

「なるほど。公式は丸々暗記してもいいですけどその場で計算して作ってしまったでもいいですよ。特に解の公式は面倒です」

遼風さんがノートに〈 $ax^2+bx+c=0$ 〉と書いた。私の書く字と違って、止めも払いもしっかりしていて、どんな順番で書いたかが一目で分かってしまう。それでも国語の教科書のようには冷たいイメージのある字面ではなく、どこか暖かみのある、遼風さんらしい文字だと思う。字は口ほどにもものを言う、なんてね。

「これは基本的な二次方程式ですけど、これを変形するだけで解の公式になるんですよ」

〈 $ax^2+bx+c=0$ 〉の下に遼風さんは〈 $ax^2+bx=-c$ 〉と書き加

え、〈 $4a^2x^2+4abx=-4ac$ 〉と書き連ねた。

「ここで何をしたかはわかりますよね」

二つ目の式と三つ目の式を見比べながら、「 $(4a)$ を両辺にかけた」と言うと、遼風さんは「当たり前です」と褒めてくれる。そして四つ目の式として、「 $(4a^2x^2+4abx+b^2-b^2-4ac)$ とシャーペンで滑らせる。

「これは両辺に $(b^2)$ を足しただけです」

「その通りです。そしてこの式をよく見ると、こういう形に変形できますよね」

その下に「 $(2ax+b)^2=b^2-4ac$ 」と書いた。

「そっか。累乗を外すためにはプラスマイナースルートにすればいいから、 $2ax+b \pm \sqrt{b^2-4ac}$ になって、」

「後は左辺の $(b)$ を右辺に移項して、 $x$ イコールの形に直すために $(2a)$ で割れば……ほら」

最後の一行は見覚えのある解の公式だった。教科書の証明は分数や括弧が沢山出てきてわかりづらいけど、遼風さんが教えてくれた方法は分数が一つも出てこなく見た目一つとっても単純明快だった。

「公式を丸暗記するのではなく、こうして作り方を一度勉強すると、結構頭に入るんですよ。なので実際のテストでは公式を作ると言うことをしなくても、自然と覚えてしまっているのです」

「なるほど」

確かに、こうやって一度でも計算しておけば嫌でも覚えてしまうかも知れない。それに、ただの数列として暗記するよりは意味のある式として覚えることが出来そうだ。もしかしたら、見て覚えるのと書いて覚えるのでは、脳の記憶の仕方に違いがあるのかも知れない。少なくとも、脳の中で作業に関わる箇所は、ただ覚えるだけよりも、書いて覚える方が多いのは確かだ。

「そういえば遼風さん」

「は？」

「私を呼んでいましたよね」

「あつ、そうです。もう七時を過ぎましたし、今日はこの辺りでお開きにしませんか？」

机の上に置いた腕時計の針をみると、長針はすでに $(15)$ を指していた。

庭先に植えられた桜が街灯に照らされ深いピンクに染まる頃、図書館で借りた本の重みをしっかりと左肩で受け止めながら歩く。ようやく春になった気がするのに、後一月もすれば梅雨に入ってしまう。きつと、今年も私の誕生日の前後になると思う。

「今日は結構進みましたね」

「はい。これなら中間テストに間に合いそうです」



「ここ最近、今までよりも大分ペースがあがってきましたね」

「そう…ですか？」

「はい。基礎ができあがりつつある証拠ですね」

「テストが近いからって、焦っているだけかもしれませんよ？」

「そうかもしれません」

「そういつて微笑んだ遼風さんの顔を、視界の隅に認めた。

「あの、今日はどうもありがとうございます」

「はい。どういたしまして」

「そういつてもう一度笑った遼風さんは、少しの間遠くに目を向けたかと思うと、ぱたりと足を止めた。一歩先で足を止めた私は遼風さんの方へと振り返る。

「あの、図書館で相談したことですけど…」

「あつ、はい」

「話題が沢山あつて一つに絞れない、なんて事はない。だから私は続きを促した。

「もしよろしければ、明日、相談に乗っていただけますか？ 音瀬さんの勉強時間を削ってしまうことになるのですか？」

恋の相談なんておいそれとできるものではない。それだけが信頼されている。それがともうれしかった。

「普段お世話になつてお礼です。——つて、何かお礼をしないとって思つて相談に乗るわけではないですよ」

「はい。ありがとうございます」

遼風さんが歩き出して私に追いつくと、前をむき直して二人並んで家への道を再びたどり始める。

やがて、遼風さんと別れないといけない丁字路に辿り着いてしまった。二ヶ月前までと違って少しいだけその距離は学校から遠のき、遼風さんの家に近づいたんだろうし、図書館からの帰りともなれば一緒に歩く距離は随分と長くなつたけど、この瞬間が寂しいのは変わらなかつた。

「それでは明日もいつもの交差点で」

「はい」

「それではまた明日」

それでもその一言で明日へ時間は繋がっていく。

「はい。今日はありがとうございます」

「どういたしまして」

遼風さんが小さく手を振ると私も胸のところで小さく手を振る。そしてその背中が見えなくなるよりも早く、自分のアパートへと向かつた。

お店をやめてから、一年生の時に一ヶ月使つただけのアパートに舞い戻つていた。何より、学校に電車も使わずいけるのはうれしい。どうしても待ち時間という無駄がある電車に

比べれば、今の生活はゆとりがある。二年ぶりに出会った大家のおばちゃんも変わりなく元気だし、中学生最後の年を過ごすには最高の空間だと思う。

門を通り抜け、リフォームの時に新調したという金属の階段を十五段上り、そのまま一番奥にある二〇五号室の前まで進んだ。鍵を差し込み、ぐるりと回転させドアを開くと、真つ暗な部屋が私を出迎えてくれた。

「ただいま」

返事があるわけではないのに、そう呟いてしまうのは何かを期待しているからなのか。

玄関の電気をつけ居間へと入り、新たに電気をつけると同時に電気を消す。私を出迎えてくれた玄関の明かりとは違う、居間の明かりと、干してあるストッキングが私を出迎えてくれる。それに一瞬だけ視線を向けた後、ふすまを取り除いてAVラックと化している押し入れの中にあるテレビを、そこまでが帰宅の儀式であるかのようにつけた。その瞬間、私の足音と冷蔵庫の音だけだった部屋に明るい音が満ちた。画面の左上には〈現代に生きる霊媒師〉と書いてある。

「人間というのは、肉体と理性と魂と命でできているんですよ。つまり、肉体に理性と魂と命が宿るという形で、私たち人間はこの世に存在しているのです」

画面中央に大きく映ったシワの深い女の人と言う。

「なるほど。ということは、死ぬと言うことは、その命を消化しきったから、ということになるんですかね？」

カメラが引くと、初老の女と若い男性が隣同士に並んでいた。

「生命体としての死はそうですね。人間としての死なら、理性や魂がなくなっただけでも死んだといえるでしょうけど」私の感情を何も揺さぶることのなかった番組はチャンネルを切り替えると同時に画面から消え失せた。バラエティー、ドラマ、ロードショー。一通りチャンネルを回して辿り着いたのは、〈激撮！ 万引きGメン〉だった。

しばらく立つたままでその番組を見続け、万引き犯が一人捕まったところで、テーブルの上に鞆を置き、ストープのスイッチを入れると、クッションに座った。図書館から借りてきた勉強には一切関係ないただの小説を鞆から取り出して満足した私は、夕ご飯の準備を始めることにした。

五月四日（日曜日）

約束した交差点が見えるところまでくると人影が見えた。

けど、その人はそのまま交差点を通り過ぎ、やがて見えなくなつた。まだ、遼風さんは来ていないのかな。そんなことを、思わず速くなってしまった歩調をゆるめながら思った。

いつも通りの速度で歩いていると、さっきの場所からは死角になっていたところに立っている人影が見えた。背格好はさっきの人よりも大分小さい。少しだけ、今度はわざと歩調を速めると、その姿はどんどんと大きくなってきた。その時、その人影は左手を挙げ、左右に振り始めた。振り返り私の他に誰もいないことを確かめると、私はその子の元へ走り出した。

遼風さんの少し手前で走るのをやめ、ゆっくりと近づくと「こんにちは」と彼女が言った。私は深呼吸をしてから「こんにちは」と返した。ふと、左手に巻いた時計を見やる。四十分までは後五分あった。

「待たせてすみません」  
「あたしも今来たところですから、気にしないでください」  
と、言っているけれど、遼風さんなら集合時間の十分前に来ていてもおかしくないと思った。でも、あえてそのことは口に出さず、「はい」と明瞭に答えた。

会話の中心になったのは、もちろん昨日約束したあの話だ。会話と言うよりは、今日はこの話題をするために集まったようなものだから、会議に近いのかもしれない。

「その人には一年生の時にともお世話になっています」  
「それでは、遼風さんはその人のことをよく知っていますので

すね」

「いえ、そういうわけでも…」

昨日とうってかわってノートの一つも広げられていない机の上に両の腕を置いて、遼風さんが目を伏せた。

「お世話になったといっても、教室で相談に乗っていただいただけなので。クラスメイトだとしても藤井さんのことをよく知っているというわけではないのです」

そこで話が終わるかと思っていたらすぐに、

「相談に乗っていただいただけと言っても、言葉ほど軽い内容ではありません」  
と続けた。

言葉の綾を見つけてあわててフォロワーする辺り、遼風さんにとつてその人はなくてはならない人なんだと思う。たとえそれが、男女間にある恋心でなかったとしても。

「それで、遼風さんはどうなんですか？」

「どう、といいますか？」

「感情はともかく、付き合えるのか付き合えないのか」

「えっと…」

遼風さんは左手であごを支え、目を瞑った。

しばらくして目を開けると、

「悪くない方かただとは思いますが」

と、曖昧に答えた。

「でも、あたしはまだ藤井さんのことをよく知らないですし、それはきつと向こうも同じだと思います」

どうやらここは、ありがちな展開になるような気がしてきいた。というよりも、それ以外に選択肢がないように思える。

でも、こんな状態で告白するなんて、藤井さんという人もたいした度胸だと思ふ。もしかしたら、二年のクラス替えで話すきつかけを失ってから今まで、ずっと悩んでいたのかもしれない。遼風さんもそんなことぐらい考えているに違いない。

だからこそ

「でも、同情なら迷惑ですよ」

と、声を引き締めて警告した。

「その事ですけれど…」

机の上ののせていた両手を下ろし、小さい体をさらに小さくして遼風さんは言った。

「あたし、こういう事を断るのがとても苦手なのです」

目を伏せて、弱々しい声で…その言葉の意味するところが嫌なぐらいに伝わってくる。そういえば、図書館に入ってから一度も目が合っていない。これもきつと遼風さんの心の表れだ。

「告白はとても勇気があることだと思います。きつと、とても悩まれたに違いありません。その事を考えてしまうとむ

げに断ることもできなくて…」

「でも、そんなの相手のためにならな——」「わかっています。ですからその時にその人に恋してみよう、と思うことにしているのです」——」

「だからって…」

「ですから、一度はOKしてしまうのです。たとえそれがクラス全員であったしの反応を伺おうとしている悪戯だと知っていても」

私は次にどんな言葉をかければいいんだろう。悪戯というのは王様ゲームとかトランプの罰ゲームだと思う。いや、もつと単純なことなのかもしれない。じゃんけんで負けた人とか、何となくとか。

「あの、音瀬さん」

声に反応して遼風さんの方を見ると、今日始めて遼風さんと目が合った。黒目の替わりに朝露でも入っているんじゃないかと思わせるような、底知れない澄んだ瞳だった。

「なんですか？」

「恋って、どんな気持ちなのですか？」

時は黙する、といえぱいいのかもしれない。休日の静かな図書館の中で、二つの腕時計の音だけが正確な変拍子を刻んでいく。

恋。愛。色。文字や音にするのはこんなに簡単なのに、言

葉にするのはどうしてこんなにも難しいのか。

私にもよくわからない。ラミソールでの感情は所詮営業用のものであって本物ではない。それに、お母さんに私が抱く感情も恋人同士の愛情とは違う。人を想うことが恋だとしたら、それは私にとっても経験したことがない未知の世界なんだ。

それでも、遼風さんは私の言葉を待っている。私をじっと見つめて待っている。だから、期待された答えには到底及ばないとわかっていても、自分の言葉で言った。

「その感情を手に入れるためにも、友達から始めてみてはいかがですか」

）

机の上に置いたノートや教科書を一旦閉じ、背伸びをしてゆっくと息を吐く。こり固まった頭と体をほぐしながら、わざとらしい欠伸をした。

「お疲れ様です」

「遼風さんもずっと教えっぱなしで大丈夫ですか？」

普段何気なくやっていることをいざ説明してくださいなんて言われたら、慣れていない事なのだから疲れて当たり前前だと思う。こんな事を六時間もやってくれる遼風さんには頭が

上がらない。今日だけは前半が遼風さんの相談だったけど、それでも長時間には違いない。

「一休みしませんか？」

「そうですね。どうしましょうか」

「それじゃあ…」

何気なく辺りを見渡して、ふ、と、外の景色が目飛び込んできた。無彩色で直線的で硬くて冷たい窓枠の向こう側にそれはあった。鮮やかで曲線的で柔らかくて暖かい春。校舎と渡り廊下で縁取られた小さな中庭には午後の太陽が惜しげもなく降り注ぎ、春の風が優しく草木を撫で、鳥が歌い、花が微笑んでいた。

「あそこに行きませんか」

遼風さんが私と同じように窓の外を見たんだろう。数秒の時間の後、「はい」と、いつもより少しだけ声のトーンを高くして言った。

ボトルのキャップを力強く回すと、枝に留まっていたと思える鳥が羽音を響かせながら遠ざかっていった。

「つかぬ事をお聞きしますけど、音瀬さんには…えっと…心奪われるような方などはいらっしゃるのですか？」

唇を湿らせるだけかのようにお茶を飲んだ後、遼風さんは私を見つめ、そう言った。

「私ですか？ 特にいいですよ」

「どうしてですか？」

どうしてなんだろうか。そんなことは真面目に考えたことがなかった。子供の頃に白馬の王子様が現れて私を連れ去ってくれる、なんて言うことも考えたことはないと思う。男は女とやればいいと考える節があるけど、それが同時に全てではないことぐらい分かっている、知っている。でも、経験は理論を上回るんだ。

きつと、いつか私も恋に墮ちる時がくる。

たぶん、それは幸せなことなんだと思う。

だけど、それは今ではない。

それは、男に懷疑心を抱いている限り訪れない。

たとえ、優しくされても。

たとえ、口説かれても。

「どうしてでしょうね」

自分の心を隠すために、私は少しか言葉が濁した。そんな私の言葉に遼風さんは少しか時間を置いて「音瀬さんは理想が高そうな気がします」と言った。

悪い意味で目が肥えているのは確かだと思う。汚い男の人を見る度に理想は高くなっていく。割り切った付き合いならばそれなりにこなせる自信と経験がある。でも、長い間それを続ける自信はない。付き合うなら、体も心も許せる人。そ

んな人と付き合いたい。

「そうかもしれません」

遼風さんはどうなんですかと聞こうとして、あの言葉が返ってくるだけだと思い、その言葉を飲み込んだ。あたしに好かれた人は迷惑だと言っていた人が恋を探そうとしているんだ。その勢いを削ぐようなことはしたくない。

「素敵な方が見つかるといいですね」

それにほら。こんな場面に、遼風さんの沈んだ顔なんて、似合わない。

笑顔を振りまく遼風さんに、自身の微笑んだ顔に違和感を抱くことなく「そうですね」と答えた。

## 居元直哉

受け付けで有料のタオルを借りてホクホクとシャワー室へ向かう茜の後ろの姿を見ながら、息をゆっくりと吸い直した。壁に掲げられた時計はまだ十二時にすら到達していないし、集合時間まで大分余裕があるから構わないだろう。これがお風呂だったら全力で止めに入らないといけないが。あのお風呂好きは何時間入るか計り知れないものがある。綺麗好きと言うよりはお風呂に入るのが純粹に好きなんだと思う。

「はあ…」

息をゆっくり吐き出して、天井を見上げる。

「タオルのレンタル料っていくらだっけ…」

）

同じ石けんの香りを二人で薫らせながら、新河流駅までの道をのんびり歩く。時折肌を滑る風が火照った体を優しく冷ましていった。

「それにしても、直ちゃんまで浴びるなんて驚いたよ」

「まあ、待っている間は暇だからな」

「だね」

「それでも茜は帰ったらお風呂に入るんだろ？」

「もちろんだよ」

それが当然と言わんばかりに茜は大きく頷いた。横から見た茜の顔はケーキを食べる寸前のように幸せに満ちあふれていた。

駅に向かうに従って道路幅は広がっていく。道路の脇に白線が引かれるようになり、片側にだけ歩道が出来る。やがてセンターラインが引かれ、車がスムーズに通行できるようになると、歩道は縁石で車道と分離される。周囲に人が増え始め、二人並んで歩道を歩くのが難しくなり始めた頃、茜が足を止めて言った。

「直ちゃん」

「ん？」

「文化祭、楽しかった？」

幾つかのことが頭をよぎり、中学生の頃と比べてみる。

「まあ、何というか、充実していたな」

「そっか。楽しかったんだね」

「まあな。忙しかったけど、それも楽しめた気がするし」

学校に二日も泊まり込んでしまったことを含め、面白い体験を沢山することが出来た。そう言ったことも含め、楽しい…いや、参加して良かったと思える文化祭だったと思う。

「そうだね。なんというか、充実感って言葉がぴったりだよ  
ね」

「ああ」

茜と同じ事を考えていたことを少し嬉しく思い、自然に頬  
が綻んだ。

「さて、じゃあ、あと一つの文化祭のイベント、楽しまないとね」

「そうだな」

ご苦労さん会のために商店街に向かっていること、それは  
三人でやると言うこと、待ち合わせに駅に向かっていること、  
茜の他に一人いることを思い浮かべて辿り着いた答えは、二  
人きりだったらよかったのと言うことだった。

「いやー、私服姿の月詩さんも——」「さて、どこで食べよ  
うか」——」

「来てみたのはいいけど、ファーストフードとかお菓子屋さ  
んぐらいしか知らないよ？」

モカ珈房でやろうかという案は、『あそこは騒ぐような店  
じゃないからなあ』という俺の一声で棄却されている。その  
ためにも何か店を見付けなさい。商店街の店を思い浮かべな  
がら、三人で多少騒いでも良さそうなところを探す。

「路頭に迷う月詩さんを救うために俺が一肌——」「それ

じゃあ、Everydayなんてどうかな？ あそこなら店自体が  
賑やかだし」——」

「あつ、それって、入り口の所に出来たお店でしょ？ 入っ  
てみたかったんだよね」

「Everydayか……」

二連続で話を流されても凹まないとは、流石ポジティブシ  
ンキング。

「どうかしたの？」

いつもと違う義明の様子に茜が声を掛ける。

「俺、あそこの店には辛い思い出が……」

きつと、ギャンブルの時にしか見せないであろう真面目な  
顔をして腕を組む。

「それじゃあ別の店を」と言う言葉は、義明自身の「でも、  
月詩さんが一緒ならば、火の中、溶岩の中！」という言葉に  
よってかき消された。

「じゃあ、決定で」

理由が不純だとか、深刻な顔をしていた割には吹っ切れる  
のが早いだとか、ツツコミどころは山ほどあるが、問題ない  
のには変わりない。それに、席を取るためにも早めに行動し  
た方がいいのだ。

「で、Everydayはこっちだっけか」

「えっと、西の方だから、こっちだな」



義明が指差した向きとは反対の方角を示す。

「それじゃあ、いきますか」

学校で見慣れてしまったこの三人の組み合わせも外では珍しい。一悶着というわけでもないが、目を使ったやり取りで茜の左側に義明、右側に俺が付くことになった。

「それにしても、こうやって外をこのメンバーで歩くなんて面白い組み合わせだよな」

「俺としては月詩さんと二人っきりで」

「お前はもうすこし落ち着け」  
義明はいつになく元気な上にテンションが高い。その理由が簡単に想像できてしまうところも、普段の義明の行動があらさまだからだ。

その原因である茜を見る。シャワーで濡れた髪はまだ乾いていないのか、いつもより黒に奥行きがあり、思わず目が行ってしまふ。もしかしたら、俺を待たせていると思っただライヤーの時間を短くしたのかも知れない。バスケットの時は纏め上げられていた髪も、今は全体を重力の思うが儘にしている。頬の色はまだ体の火照りが残っているのだろう、いつもより赤に近い。紺色のロングスカートに合わせ、いかにも女の子らしい薄い布地で作られた服を幾つか重ね、着飾る茜は色っぽく見えた。

手に持っているのがジャージとバスケットボールの入ったバックじゃなければ、の話だが。

「迷惑にならないように端の方に行こうぜ」と義明が歩き出し、俺達はそれに付いていく。義明が俺達を促し、茜が一番奥の席に座るとその真正面に義明が移動し、俺は茜の隣に着いた。学食と違って俺の正面に二人の顔が見えないからか、奇妙な違和感があった。そういえば、学食のテーブルは丸テーブルだから、ことと同じように茜が隣に座っていても真横と言うことも無い。

「お昼時なのにあっさり座れたね」

義明が携帯を取りだして画面を見る。

「まあ、もう二時だし」

「それよりも、平日って事の方が大きいだろうな」

「なるほど、そういえば今日は火曜日か」

「昨日学校に行って今日はお休みだから、土曜日と勘違いしてたよ」

合点がいったところで、茜がテーブルの隅に置いてあるメニューを二つ出して俺と義明の前に置いた。置かれたメニューを茜と俺の間ぐらいの位置に移して、表紙を捲る。一ページ目には、へー○○パーセントオーストラリア産ビーフを使った当店自慢のハンバーグと書かれていた。

「それじゃあ、俺はとりあえず生……」「おい！」——  
春巻きでも」

義明がわざとらしい笑顔で俺の顔を見る。なんか微妙に悔しい。そんな俺の様子にはお構いなく、しばらく俺の顔を楽しんでんだと思われる義明は何事もなかったかのように「直哉はこの店に来たことあるのか?」と言った。

「まあ、一度は」

「「えー」」

「なんだよ二人して。俺がこの店に来たら駄目だったか」

茜と義明が目を合わせて何度か瞬きをする。

「だってなあ……」

「だってねえ……」

「一人で来たって事だろ?」

「一人で来たの?」

「そうだけど、それがどうした」

一人で来ることが前提というのは、複雑な心境だ。

「一人でファミレス……」

そう先に呟いたのは、義明だった。

「俺には真似できねえな」

「モカ珈房はそう言う雰囲気のお店だし、一人でカラオケなら最近流行ってるから何とかなるけど、流石にファミレスに一人は……」

二人が言いたいことが何となくわかってきた気がする。確かに俺だって店に入ってから変だなんて思ったよ、場違いだなと思ったよ。

「コーヒーに誘われて勢い余って入っただけだ。寂しい人間だと思ふなよ」

そういえば、と思い出したのは、最初から最後まで一人で席に着いていたわけではないと言ったことだった。あの時は確か、一人だからとすぐに空いている席に案内して貰って、気が付いたら待合い席に遼風さん達が居て、勢い余って合い席を勧めてしまったんだよな。今でもあの時の行動には疑問点が多すぎる。そんなに親しい仲間でもないし、それどころか遼風さんと一緒にいた音瀬さんはあの時が初見だ。偶然、絵を描いているところを見られていたから話題も途切れなかったが、絵の話題がなかったらあの席にいた全員が気まずい思いをしただろう。

「大丈夫だ。お前は生物学上、一人で居るべき生物だ」

義明の一言を無視して、茜が新たに捲ったページに目を向ける。今度はパスタとグラタンのページだ。

「あー、このスパゲッティ、マッシュルームとミートのソース、チーズ一杯かけたら美味しいだろうな」

「ピザと言い、スパゲッティと言い、チーズが好きなのか?」

「うーん、どうだろう」

曖昧な答えに興味もなくなってしまう、俺も茜と一緒にメニューを覗き込む。しばらくしてから、茜がもう一度ページを捲る。今度は和風の膳物や丼物のページだ。その中の一つに、ご飯とお味噌汁、サラダという基本セットに加えて、おかずを一品選べるメニューがあった。ご飯とお味噌汁から立ち上る湯気に、みずみずしいサラダ、そして、（貴方のお好みのおかずを）と書いてある文字の下には、地鶏ステーキとおろし付き唐揚げ、おろしチキン竜田の写真がそれぞれ掲載されている。木肌色に焼けた地鶏に薄切りのニンニクがのつた地鶏ステーキ、切り分けた瞬間油がしたり落ちてきそうな程ふりふりした唐揚げ、上品な衣に身を包んだ上に大根おろしを大胆に掛けられたおろしチキン竜田。そのどれもが食欲をそそった。そして、その写真の下には、堂々と「青森県特産《青森軍鶏ロック》使用」と書いてある。スーパーでもそうだが、自分の県の食材を見ると少し嬉しくなるのは、生まれ育った土地だからだろうか。きっとニンニクも田子町産だろう。

「俺、これにしようかな」

「あつ、美味しそうだね、これ」

「大盤振る舞いだな」

「義明の言うとおり、一一八〇円の大盤振る舞いだ。これに

コーヒーを加えると一五〇〇円ぐらいだろう。

「外食なんて滅多にしないからな。偶にはいいだろ。今日はそのために集まったんだし」

「確かにな。じゃあ、おれも倉石牛ステーキ膳にするかな」

「二人とも豪華だね。それじゃあ、私も釣られちゃおうかな」

茜が次のページを捲る。そこには茜と一緒にいると非常に良く出会う物が数枚記載されていた。

全員のメニューがテーブルの上揃うと、義明が「それじゃあ、直哉、頼んだ」と言った。文化祭については最初から最後まで俺に主導権を握らせてくれるらしい。

その台詞の直後、全員が申し合わせたかのように、それぞれ、烏龍茶、コーラ、コーヒーを手に持った。

「それじゃあ：お疲れ様でしたー」

「お疲れさーん」

「お疲れー」

三人の声が重なり、同時にコップとカップが軽い音を立ててぶつかり合う。客が少ないからこそ出来る行動だ。一口すすって、これまた三人同時に息を吐き出す。あまりにも三人の息があったことに、これまた三人で笑ってしまう。

「頂きまーす」

開口一番は茜。たっぷりとチーズの乗ったピザを一切れ持って、早速食べ始める。目を細めている様は本当に美味しそうだ。

「じゃあ、俺も、頂きます」

「俺も喰いますか。頂きます、っと」

二人揃って味噌汁に真っ先に手を付け、箸を湿らせてから、倉石牛ステーキと地鶏ステーキそれぞれに手を伸ばした。一口サイズに切り分けられている地鶏ステーキを一切れ掴み頬張る。もちろん、飲み込む前にご飯を入れるのも忘れない。

ご飯とそれに合うおかずが揃ったときのこの食べ方は、だれだって理解してくれるはずだ。

「旨いなあ」

義明が溜め息混じりにそう呟く。普段はどんな料理を作っているんだろうかと、少しだけ興味が湧いた。お菓子が作れるぐらいに器用なんだから、俺よりも料理は手慣れているはずだ。

「それにしても、無事に終わって良かったね」

「ああ」

早くも一切れ目を食べ終わった茜がおしぼりで手を拭きながら言った。

「特に事故も起こらず」

だれにも迷惑をかけることなく。

「お前は考える真面目なんだよ。こういうときは、売り上げも絶対調で、とか言っておけ」

「そう言う台詞は、生物学上、お前専用なんだ」

「絶滅危惧種だから大切にしろよ」

「滅びた方が地球のためだ」

「つれないなあ」

そんな二人のやり取りに、茜が「ほどほどにね」と言っ、ピザを一口頬張る。俺達に言ったのか、食べ過ぎないようにと言う自分への暗示なのかはよくわからなかった。

「そういえば、直ちゃん」

持っていたピザを半分ほどまで食べ、それを皿の上に置いてから茜が言った。

「ん？」

「直ちゃん、一旦休憩に入って、その後実行委員会に呼び出されたよね」

「ああ」

昼休みが少なくなったのもそうだが、あの後、茜からアイスクリームが足りなくなったと聞いてその対応に追われていたから、昼ご飯もパン一つになったという悲しいお昼の顛末だ。

「丁度その時にね、マスターと奥さんが来たの」

「俺が休憩中に来ていた二人組だろ？ 二人揃って最難関の

幸ブレンドを頼んでた」

「そうそう」

幸ブレンドと言えば、四種類の豆を使うブレンドで、基本的に俺が担当していたブレンドだ。一日目の終わりに作り方を教えたけど、みんな上手く淹れてくれたのだろうか。

「それで、マスターは何か言ってた？」

「うん。『このブレンドの割合はいいね』って。あと、奥さんは『美味しい』って」

「本当か？」

どうやら心配は杞憂に終わったようだ。ペーパードリッップでも、コツさえ覚えれば美味しいコーヒーを淹れることが出来る。それは俺自身が毎朝実感していることでもあった。

それにしても、あの二人組と義明が特定したと言うことは、この間初めてモカ珈房に入ったであろう義明が、マスターと奥さんの顔を覚えていた事になる。それはもの凄い記憶力だ。いや、女の顔なら忘れないうと豪語しそうな義明のことだ。少なくとも奥さんの方だけ顔を覚えている可能性も…でも、あの時奥さんはカウンターに立つてたっけか。

箸を休め、記憶を掘り起こしても、出てくるのは文化祭の打ち合わせと、『初雪だ』と騒ぐ茜のことしか思い出せない。日常に溶け込んだ風景ほど、いざというときに思い出せないものだ。しかし、いくら日常でも忘れられないモカ珈房の光

景がある。そして、そのことを思い出した直後、一つの疑惑が俺の中で持ち上がった。

「なあ、茜」

「なに？」

「二人の服装って…」

「そう。私もそれを言おうと思ったんだけど、いつも通りの格好だった」

「やっぱりか…」

流石にあの格好で学校に来たら、顔は忘れても服装でマスターと奥さんと見分けが付きそうだ。仮装大会ではない、本物の衣装、本物の着こなし、本物の振る舞いがあの二人には備わっている。

「なんて言うか、歩く中世って感じだよな」

歩く中世、か。なかなか的を射ているように思える。全くと言っていいほど光を反射しない黒のモーニングに、ひらひらと裾をなびかせるドレス。クリーニング代とかどのぐらい掛かっているんだろうか。

しかし、日曜日の昼間と言えばモカ珈房にとっては稼ぎ時のはずなのに、文化祭に来てくれたと言うことは、店を閉めてきたと言うことだ。俺に会うために来たかどうかはわからないが、そんなことに関係なくお札と挨拶ぐらいはその場でしたかった。一瞬、昼休みを取ったことを悔やんだが、使え

るミルの数が決まっているのだから仕方がないと割り切った。場面や時間はどうであろうと、こういうのは気持ちや態度が大事なのだと思う。今度店に行つたときは、モカ珈房ブレンドでも頼んでみよう。

義明が店員さんを選んで人数分の唐揚げを追加で注文する。それを見て茜も餃子を注文する。いよいよテーブルの上は賑やかになり、三人の会話にも花が咲く。いつもの数倍は豪華な昼ご飯をいつもと同じメンバーで食べる。そんな中俺は、二人の会話に相槌を打ちながら代休二日目の明日の予定に考えを巡らせることにした。

♪

盛り上がった証しを下腹部の辺りに感じながら、歩き慣れた道を二人で家へと向かう。

「それにしても食べたね」

「茜はな」

「直ちゃんも、だよ。こういうときは犠牲者は多い方がいいの」

「もうすぐ冬だから蓄えたって事にしておけばいいさ」

「そうかも」

明るく笑つた声が、対照的な姿の住宅街に響く。

「じゃあ、ここで。気をつけて帰れよ」

「ありがと。じゃあ、また明後日」

「ああ」

街灯が照らせる範囲から茜が外れ、その姿が曖昧になるまで背中を見送り、家の門扉を開いた。庭を通り抜け、玄関の前に立ち、鍵を開け、家の中に入る。だれにも見られない、だれにも迎えられない、いつも通りの儀式。

「ただいま」と言う声を肌寒い廊下に投げ捨てる。

廊下を数歩歩いて居間に入り、明かりのスイッチを入れる。透明な石がぶつかり合うような音が何回か続き、部屋に白い明かりが灯る。そのままストーブのスイッチを付け、テレビを付けると、部屋にはようやく人の声が響き渡るようになる。画面の左上には〈特集！ 行列の出来るラーメン屋〉と言う文字が躍っていた。

「ここここですよ。うわあ、すごい行列ですね。早速人数を数えてみたいと思います」

画面中央に映つた、たぶん新人アナウンサーの女の人言う。

「一、二、三……まだまだ続きますねー」

行列の出来るラーメン屋なんだから、続かないと困るだろう。チャンネルを切り替えると同時に、無駄にテンションの高いアナウンサーは画面から消え失せた。バラエティー、ドラマ、

ロードショー。一通りチャンネルを回して辿り着いたのは、  
「警察は眠らない！ 激録密着300日」だった。  
しばらく立ったままでもその番組を見続け、酔っぱらいが交  
番で寝込んでしまったところで、汗くさい服を脱ぎ、新しい  
シャツに着替えた。